

多義語の意味拡張と意図性についての研究

A study on semantic extension and intentionality of polysemous words

栗田 優羽

Yu Kurita

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：多義語，動詞の意図性，統合モデル

Key words : Polyseme, Intentionality of verbs, Integration models

1. 研究目的

本研究では動詞「招く」を中心とした〈事態を発生させる動詞群〉を対象に、現代日本語動詞の意味拡張を考察する。具体的な行動や動作を意味する動詞が、意味拡張の結果「原因 A が事態 B を発生させる」という意味を持つ場合がある。因果関係であればなんでもこの意味で表せるというわけではなく、別の動詞が同じような「因果関係に基づいて事態を発生させる」という意味を持つにもかかわらずそれぞれの動詞には意味の差が見られる。この事態を発生させるという意味拡張には、元となる具体的な行動や動作の意味や拡張した他の意味が大きく関わっていると思われる。よって、〈事態を発生させる動詞群〉である「呼ぶ」「招く」「もたらす」という 3 つの動詞を、動詞それぞれが持つ意味と、「因果関係に基づいて事態を発生させる」意味の関係を考察し、糸山(2021)『[例解] 日本語の多義語研究認知言語学の視点から』が提唱した統合モデルにより多義構造を明らかにすることが本研究の目的である。

2. 研究実施内容

動詞「招く」の意味拡張を分析するにあたり、まず拡張した意味について、先行研究から 2 点の課題が見られた。森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、小泉保他(編)(1989)『日本語基本動詞用法辞典』などの先行研究では「招く」は①抽象的な意味の場合はマイナスの意味を表す文で使われる、鈴木智美(2009)「「呼ぶ」と「招く」の意味分析—その多義的意味とコロケーションについて—」、夏海燕(2017)『動詞の意味拡張における方向性—着点動作主動詞の認知言語学的研究』などの先行研究では②1「人を招待する」という意味の中に 2「人を

ある役割のために招待する」意味があるとされている点である。

①については(1)のような物に関して抽象的な意味で「招く」を用いる際にプラスの用例が見られることに注目した。

(1) この壺が幸せを招きます。(作例)

「物・行為と事態が因果関係を持つことの説明と、実践の推奨を目的とする媒体」として「スピリチュアルアイテム解説本」というジャンルに注目し、〈事態を発生させる動詞群〉の実例観察、内省判断調査により意味分析を行った。「スピリチュアルアイテム」は本研究において、次の様に定義した。「物 A を持つ/大切に/所有する」などの行動 X(壺)を、行動の主体が状況・状態 Y(幸せになる状態)と関連付けて考え、「行動 X が状況 Y を発生させた(壺が自分を幸せにさせた)」と判断する際の、物 A(壺)にあたるものである。このジャンルでは「招く」「呼ぶ」「もたらす」がほとんど同じ意味で使用されること、かつ格の名詞が因果関係に影響を与えないため、「もたらす」と共起するヲ格と「招く」と共起するヲ格を比較することで「招く」の特徴を分析することが出来た。

その結果、先行研究では「プラスの例も確認できる」で留まっていた記述に「マイナスの事態であれば招けるというわけではなく、「招く」を使う際には具体/抽象・プラス/マイナス問わず必要になる要素がある」という指摘を加えた。

要素は次のようなものである。「招く」の中心的な意味である「動作によって人を近くに来させる」の「動作による合図」や「招き手が管理する場に呼び寄せる」といった要素が拡張した意味にも影響し、「何らかの合図・約束があること」「外部から内部への移動を伴うこと」という要素が拡張し

た意味にも必要になる。

また、②についても、仁田(2010)「多義性を有する用言についての二三の考察: Lexico-Syntaxの姿勢において」『語彙論的統語論の観点から』の概念を元に、人を招待する意味の際に必要な格と人を役割のために招待する意味の際に必要な格が異なることから、この二つは別義として捉えられることを指摘した。

小泉保他(編)(1989)『日本語基本動詞用法辞典』はこの2つの意味について次の様に記述している。

1 「[人・組織] {が/は} [人] を [催し・活動・所] に招く」

2 「[人・組織] {が/は} [人] を ([職務・役割] {に/として}) ([所] に) 招く」

仁田(2010)は「その動詞が可能体としてある種の名詞句を取りうる」といった、潜在的な能力としての名詞句との共起関係」に注目して多義的別義を認定する考え方を示した。

仁田(2010)に基づくと共に、1の意味では招かれた者の移動や参加が注目されていることに対し、2の意味では招いた者が見込んだ招かれた者の特定の能力が注目されていることから、1と2は別義として捉えることを指摘した。

3. まとめと今後の課題

このことから、本研究は「招く」の意味には①「招く」の中心的な意味である「動作によって人を近くに來させる」の「動作による合図」や「招き手が管理する場に呼び寄せる」といった要素が拡張した意味にも影響し、「何らかの合図・約束があること」「外部から内部への移動を伴うこと」という

要素が拡張した意味にも必要になること、②1「人を招待する」という意味と2「人をある役割のために招待する」意味の格体制が異なることから1と2が別義であることの2点を指摘した。

今後は、今回可能になった事例に即した意味記述を統合モデルで記述することを課題とする。

引用・参考文献

- [1] 靱山洋介. “多義語をめぐる諸問題”. [例解] 日本語の多義語研究 認知言語学の視点から. 大修館書店, 2021, pp.3-5.
- [2] 仁田義雄. 「多義性を有する用言についての二三の考察: Lexico-Syntaxの姿勢において」『語彙論的統語論の観点から』(仁田義雄日本語文法著作選第3巻), 株式会社ひつじ書房, 2010[1977], pp.85-100.
- [3] 夏海燕. 『動詞の意味拡張における方向性一着点動作主動詞の認知言語学的研究』株式会社ひつじ書房, 2017.
- [4] 小泉保他(編)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店, 1989.
- [5] 森田良行. 『基礎日本語辞典』角川書店, 1989.
- [6] 鈴木智美. 「呼ぶ」と「招く」の意味分析—その多義的意味とコロケーションについて—, 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』, 35号, 2009, pp.1-15

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(DB2315)「多義語の意味拡張と意図性についての研究」を受けたものです。